

- 1 施設見学
- 2 入居日
- 3 引っ越し後（ケータイ、通院事情）
- 4 リハビリ棟再訪へ
- 5 温泉宿
- 6 痙縮、本格化にて

## 1 施設見学

九月の初旬、遠来の姉と妹に付き添ってもらい、タクシーを移動手段に半日で近隣三カ所の施設見学が済んだ。車椅子は積み込まず、訪問先で借りた。数時間後、ようやくリハビリ棟方面を目指すと、窓外を流れ去る途上風景はまるで旅先から我が家にもどる折のような心象だった。それほど回復期ハビリ棟での生活に馴染んでいたのだろう。

例えば嘗ての一夕、納涼花火打ち上げの目安にした隣接市クリーンセンターの煙突を、眼前に望む三カ所目の施設前に降りた際の感想は、正直、「嗚呼…遙々と来つものかな」と万葉集並の旅情である。病院から車でわずか十分しか走らぬ郊外でも、それが実感だった。見渡す限りの田園、まわり一帯は、刈り入れ前の稲穂が垂れて、吹きわたる青嵐にザワザワ打ちなびき、海波のうねる如く揺れかえっていた。小気味良い程の涼気である、単に見ているだけならば。

「ご覧のとおり、緑に囲まれ静かな環境で良い所なのですが、此処は…」と施設を案内の方が、或るトゲのごとき含みを持たせてこう呟いた。「冬場になると赤城おろしの空風にびゅうびゅう背中を叩かれて凍え、わたし等も厭に成るほどです」

一見してまだ真新しい施設だが、家壁を鳴り震わす寒風と戦わねばならぬ、じきにそんな時節が待つのである。小さいベッド一つきりのガラんとした空き部屋を拝見し、尻込みした。

また、二カ所目の洒落た施設は街のメイン通り沿いで賑わしかった。鉄道駅に近く買物などにも至便だが、こまごまと説明があった。何でも、入所後に同系列経営のデイサービス施設（ゲームやカラオケや入浴を提供）へ毎日通うのが必須条件とのこと。その場ですぐ、仮契約のサインを求められ、さすがに躊躇した。だが今なら幸いに一室空いている、そのデイサービス中で住人が留守という部屋を試しに見せられた。すると、けばけばしい色の日用品があふれ返っており、やはり気が萎えた。

結局、病院から程近く最初に寄った施設、そこが余計な縛り（入所条件）も無く、何やら管理面も緩い印象で、且つ手の空いた女性職員が受付ロビー脇でケラケラ笑ったりしていた。広い三つの空き部屋を全部見せられ、その何れを選んでも結構、しかも入居日までを予約で押さえても無料というのである。内心、此処に傾いた。日当たりの良さで選んでみたら、本当に直ぐその戸口に「予約済み」表示の札が貼られた。新住居の決まった瞬間である。

あっけなかったが、発症入院以後ともなう一事停止中の歯車間に、コトリと音がして何処かが噛み合わさった弾みで、たった今振動し再び回り出した。そんな感じである。

まだリハビリ棟に暮らす身が、居ながらにして俄かに心慌ただしくなる。退院前に済まされねばならぬ数々の用事が、今や露わに成った。大袈裟に言えば、断たねばならぬ過去との決別だ。ただし、情に後ろ髪を引かれつつ独り北へと旅立つ演歌調の類ではない。

事態そのものはもっと単純である。差し当たってその目的達成手段に、三階スタッフステーション横の公衆電話（緑色）を味方にした。病院本館一階のコンビニ店で入手してくるテレカ（テレホンカード）の表示度数が、見る見る減って行く。

先ず、元のアパート関連だ。発症以前通りに尚、ガス・電気・水道・固定電話・家賃などが月々の銀行振り込みで支払い続けられて居る。当初、再び生きて此処から出られる等とは全く思っていない。ところが、しみじみと命拾いした上に、今は又、退期限ぎわの身が案じる暇もなく予想外の新居予約まで、とんとん拍子に済んでしまった。だから事態が斯く相成れば、次は本能剥き出しを恥じず一にも二にも止めたいのが出費（お金）である。この先が一体どうなるか知れぬが、何は無くとも拠り所には成ってくれるはず。

「あしたに道を聞かば夕べに死すとも可なり」などと気取って居られない。「憂きことの猶この上に積もれかし限りある身の力ためさん」、「それにつけても金の欲しさよ」である。

障害の身が、一刻も早くもろもろの解約手続きをせねばと車椅子上で焦る。

一台しか無い緑（公衆）電話なので、見回すと他にも用件のある患者が来て居た。ちなみに通路を遠く隔てた病院本館一階にも、確か五台ほど並ぶ電話専用コーナーが設けてある。夜間は人気のない所だ。但し、外来患者や入院の付添で込み合う昼の間、特段にそこだけが、院内エリアの携帯（電波）使用自粛によって緑電話の利用客がひっきりなしの満杯だ。並んだ誰もが、壁に向かって常に怒鳴るか笑うか喧騒に負けず何事が訴えている。車椅子の身が、其処へ割り込む余地は見つかりにくいのである。

このリハビリ棟に一台きりの緑電話も、同様であると改めて知った。しかも、通話最中の様子や声音をその背後で窺えば、閑静な棟内へと口辺麻痺で調子外れの訴え声が遠慮しがちにモゴモゴ響きわたり、且つ如何に寂しげな孤影と映るものか…嗚呼、其れが自分と重なり厭だ。

しかし、いくら自分の美学に沿わぬ事と判っても、今回ばかりは行為そのものに執着した。つまり、ぶざま且つ物分かりの悪い粘りでもって緑電話の空きタイミングを見計らい、381号室から車椅子を駆って戻るのだ。他の誰にも頼めぬ事柄、と明白だ。

空いている狭い電話コーナーに、手慣れた操作で車椅子をきっちり収納する。そして先ず、健全な左手で受話器をもちあげ、台上に一旦寝かせたら、すぐまたメモ数字を見ながら左手でテンキーを押し、再び受話器を左手でとって耳に押し当てる。プリペイド度数の減り具合を眺めつつ各機関の解約窓口担当者へ、もつれ気味の口跡で「契約の解除と予定日」を一々お願いする。静かな周囲へ、つい遠慮ぎみに喋るから当方の縫れやすい滑舌を相手に聞きかえされ、何度でも区切って繰り返さねば通じない。いわばリハビリ訓練以上なのだった。

退院予告日を考えて、イコール「契約解除日」に指定したら、すぐさま返って来た言葉が、「月途中での解約は無効です、その月分の請求に成ります」とのこと。日割り計算ではない。これは、どの機関も同様だった。予めそう知っていれば車椅子で急ぐ回廊往来は無用だった筈だが。

お陰さまで、この時の孔あき済テレカ（プリペイド五百円用）が、手もとに何枚も有る。あの失敗が口惜しくて、残り度数ゼロの空っぽカードを捨てられぬ訳じゃない。施されている日本的風景の意匠が皆、目の覚めるほど各々に美しいのである。

他にも退院前後にあれこれの手続きが要った。たとえば、レンタル車椅子の手配、ケアマネ（社会福祉協議会の担当者）との面談、市役所への住所変更手続きなどで、それらが一通り済んだのは、退院日すなわち施設（分類名称『サービス付き高齢者向け住宅』）への引越当日だった。真新しいレンタル車椅子と当月分の入院諸費用明細請求書が、退院寸前のリハビリ棟に届いた朝でもある。お世話になった入

院費を踏み倒しても行けず、支払に気が急ぎ。担当ナースとの別れを惜しむ暇もなかった。

もっとも、丁度この週に土橋ナースは研修中だった。職業柄で新たに必要な知識を学ぶ、そういう場があるらしい。長年の勤め先なのだから、いつか再会の折もあるだろう。それに、私の入所予定施設が決まったと知るや、「あら？その建物前を来ているの」と、マイカーによる通勤路沿いにある偶然を、面白そうに笑って居たのだ。

## 2 入居日

「無住のアパート宛郵便物」その転送先届け出葉書を投函したポストは、離れ間際の病院玄関前だった。そこからタクシーに乗り、大家さん宅に鍵を返しに寄って、途中でなお二、三の必要な買い物を済ませ、いよいよ施設到着である。

思えば、リハビリ棟と此処は、浴道の距離にして二キロと離れていない。それどころか、元のアパートとは自転車で五分という間近さだ。従って、この周辺の地理は知り尽くしている。食品スーパーやドラッグストア、コンビニ、コインランドリー、そして市立体育館と総合陸上グラウンドを包含する緑地公園、また図書館と文化会館、市役所などをも指呼できる絶好のロケーションだ。此処に決めた訳は、決して気紛れの偶然じゃないのである。

私の頭の中は、やがて近々に自主リハビリ訓練を積んで、当施設の隣接する緑濃い公園内の遊歩道をゆっくりと伝い、蔵書十万冊の市立図書館へ憩いに行くと思っていた。後遺症のある方の片足でペダルを漕ぎ図書館へ通う人が、この近所に居ると以前から知っていたのだ。

且つ、もし途上で気が向いてちょっと立ち寄れば、一周六キロの遊歩道沿いに沼見物も可能だ。沼ではちょうど今、繁茂する蓮群が花期を終え、秋の忍び寄る朝夕の気配に揺らぐ葉をざわつかせているはず。発症直前頃の私は、初夏陽気の晴れ渡る大空の下、浮き雲を走らす五月の涼風を全身に受け、沼のほとりの周回サイクリングが生活のリズムを成す一アクセントだった。木漏れ陽を浴びた当時の日焼け跡も、まだ素肌に残って居る。

今、退院したての身を運び、馴染の此の辺りまで戻り、あとは契約手続きさえ済ませば、その出発点となる当施設に入居できるのである。当館三階の広い食堂に設置のリハビリ運動具（ステンレス製平行棒・走行メーター付き足踏み自転車・回転ベルト付きウォーキングマシンなど）も、先の施設見学の際に確認してある。当館パンフレットには誇らし気に運動具の紹介写真が載って居るのである。

専用エレベーターで「事務所」明示の二階ボタンを押した。自動扉が開き、見覚えの有る受付ロビーに出たら、すぐにお茶が供され契約書関連の説明に入った。今日九月十七日で、退院且つ入所という記憶すべき第一歩がいよいよ始まる。忙しい自営業の弟も今朝は遠路来てくれて同席した。久しぶりに長女を筆頭にして兄弟姉妹四人が、内の一人の脳梗塞発症を機に改めて年月を隔て、この場で一堂に会したのである。『禍福は糾える縄の如し』とは、このような場合をも指すのだろうか。我々の両親はすでに亡くなって年月久しく、その同世代である伯父・叔父・伯母・叔母らも皆がもう他界している。

入所の為の複数保証人は、姉と妹が引き受けてくれた。明らかに当人（私）や弟（痛風持ち）より長命となりそうだと半分冗談を言いながらサインし判子を突いた。

施設側より幾つか確認事項があった。一つは、「延命措置を希望するか否か？」であるが、兄弟で目を見合わせ笑ってしまい、「希望せず」と記した。初日でまだ気づいていないが、通称サーコー（サービス付き高齢者向け住宅）は当然、この確認が必須対象の適齢者が占める訳である。

次の確認は、「自主外出する際の怪我は全て自責となるが、承諾か否か？」で、待ち望むところだから迷わず、承諾である。外出届の都度提出ルールにも異存は無い。

多少省略したが、凡そこうして入所手続きが済んだ。あとは予約済札の部屋に実際入ってみて、精一杯の持ち込み品を、慣れぬ住人の目で配置してもらう。見舞いにそう度々は来られぬ遠隔地である。必要な物を又改めて後日に搬入、という申し合わせが身寄り間で付いて居る。

私が部屋にひとり落ち着くのを確認して、姉妹弟は帰った。まだ外は十分に明るい、三人がそれぞれの家庭に着く頃には、釣瓶落ちの夕日が既に没しきっている頃だ。

さて、と呟いて私は部屋を見回した。今朝まで馴染んだ四床用の381号室ではない。南向きの共用ベランダに出られるサッシュ戸の向こうから、階下の道路を盛んに行き来する車のタイヤ音が聞こえる。世間に接するようで、独り居が寂しくはない。戸を引き開ければなおの事、いっそう生々しく通過音が響き入り、残暑を渡って来る風がレース地のカーテン裾を宙に翻す。その裾が柔らかくハタハタと打ち靡いて肌身に触れる一瞬ずつが、久しぶりに知るくすぐったさだった。

部屋の備品として大きなベッドが据えてあり、今夜寝る分には困らないだろう。一ト安心する。だが夕食までの時間が、何も手に付かず所在ない。とりあえず壁のコンセントにコードを繋ぎ、低い椅子にパソコンをじかに置いた。左手で蓋を開いて、車椅子から画面を覗き込む窮屈な要領で日記を打った。そして記念に、ほぼ無一物の今の状態をデジカメで撮っておくことにした。人生の終活（身辺総整理）を終えたも同然で、いっそ清々しい程に荷物のしがらみがない。

やがてそれも忘れた頃に後日、此の一トコマを見て妙な気がした。撮った構図がヴァン・ゴッホの画『アルルの部屋』そっくりだ。椅子一脚とその向こうの簡素なベッドに迫る背後の壁という訳。そこで合点した。或る日ゴッホの居た下宿部屋は、丁度このくらいの手狭さだったのだ、と。もし、此処に入所して居なければ、生涯そんな発見には繋がっていない筈だ。

デジカメには亦、懐かしいリハビリ棟一階の諸道具や、381号室での鶴崎氏のアップ風貌、手足を投げ出す小島氏の昼寝姿も退院前に収まっていた。撮った意味合もすっかり忘れていたのに。

けれどそれらは、施設生活に馴染む後日になってからの話である。

この入所初日は、「皆さん、もう夕食時刻です」と知らされ、二階自室からバリアフリーの廊下とエレベーターを経て三階食堂まで杖に縋って行った。レンタル車椅子は部屋に置いて出た。今にして思えば健脚並で、当時は手摺に頼り切らず一歩また一歩と進むことができた。

これがリハビリ棟なら私は即ナースに見咎められてしまう。たちまち歩行禁、いや廊下への杖持ち出しも自肅の対象で、みすみすテレビ台の袖机に立て掛けたままであった。

この杖は、例のリストラウンダーを製作した友人の、その亦知人から入院中に贈られた御手製の一品である。柄は黒漆塗りの洒落た造りで、象牙と見まがうグリップ付きだ。私の身長に合わせて詠えた如く、丁度手頃な重さとバランスサイズの杖である。これ以後の施設生活に四六時中、切っても切れない伴侶となってくれたものだ。

三階食堂入り口手前のパントリー（配膳室）で、私のつたない接近具合を見ていた職員のノンちゃん（皆がそう呼ぶ）が、「無理しなくて良いのに」と暗に車椅子の使用を薦めたがった。性格的に仕切り屋の傾向がある。気の良い中年女性の特長を備える親分肌を感じさせた。

「大丈夫、何事もリハビリです」私はそう応じ、笑顔の虚勢を張った。

その実、部屋からここ迄の数百歩ですでに右脚が痺れ、頼るべき手摺が各居室の扉の前は途切れるので息があがっていた。こんな長い距離を来たのは初だ。しかし、後の計測で客観的に言えば、自室から食堂迄は僅か四十メートル弱なのである。歩幅五十センチの平均的な健常者ならば、この苦心惨憺行も、

わずか八十歩で軽々と済むはずだが…。

仕切り屋ノンちゃんがテーブルの一つ（七番）に案内してくれて私の席を指定し、追加の椅子をセットした。ひじ掛け部に、杖専用ワンタッチ・ホルダーが付いている。百円均一製らしい。

「どちら側が良い？」とノンちゃんに聞かれた。ホルダー位置の事である。

後遺症が右半身で、杖は左側にしか立てられぬ旨をジェスチャーで示す。

「あ、そう」とノンちゃんが心得て、両面テープ付きホルダーを移し替えた。

そしてテーブルの先輩三人の名を簡単に紹介し、私の膳を取りに行った。

三名は立木・金井・関口の各諸氏であった。それぞれの年齢を、八十代半ば～九十代初頭と見た。やがてリハビリ棟 381 号室の如く、この七番テーブルも追々にメンバーの増減や入れ替えが起こる。勿論、他の一番～六番テーブルに於いても同様。ただ、そこに特記しておくべき一点がある。いみじくも、私の膳を置いてノンちゃんがこう言った。

「この施設の売りはね、固く冷たくなる前に見つけてくれる事。だから、安心して良いよ」と。夜間は午後九時・深夜一時・未明五時の三回、各部屋の巡回確認があると言う。

つまりそれは、通称サーコー（サービス付き高齢者向け住宅）の宿命であり、最初の入居は有っても、大原則、後々の自由退所は無く、此处を出る際はすでに誰でも仏様という意味だ。そう相成ったばかりの身を、まだ温かい内に発見してくれる、との事。

実際にそう遠くない後日、次々と同席者の静かな旅立ちを知ることになる。但し、まだこの夕刻は、勝ち気の冗談好きな女性職員がいる施設で、「飽きないかも」と思ったばかり。

食堂から戻り一人きりになると、改めて居室の意外に空虚な広さが気になった。今朝まで四床部屋で三カ月過ごし慣れた、手狭な割り当てスペースに比べ、凡そ六倍ほどもある。そこにベッド一つきりで、床にごみ籠が一つ。各ベッド周りを仕切る丈長のカーテンも、また天井で交叉する U 字型カーテンレールも無い。一斉消灯のルールも無く、何時に眠れとも言われない。夕食後の歯磨き指導に必ず来る看護助手も居ないし、パジャマに着替えるタイミングも注意されない。昼に開けたベランダ戸の外は、まだ暮れるには程遠い明るさで、網目のレースカーテンを揺する涼しげな風が吹き通って来る。盛んに車の行き交う音が、帰宅時間帯のせいか昼よりも忙しい。退院を、一層実感した。

カーテン越しにやがて西日が赤々と射しこみ、壁に熱気が籠って残暑めく部屋を、エアコンで冷ます温度調節も小さなりモコンを手で自分で決めねばならない。程良い加減が分からぬから 381 号室に倣い、26℃に設定した。あの部屋は一日中つけっぱなしだった、と思い出す。誰かが、若し余分に冷気を感じれば若い鶴崎氏が気軽に壁の表示計を微調整してくれたものだ。

そのリモコンをさっき届けに来たスタッフのノンちゃんが、開いたベランダ戸を指さして、

「外に出たい？」と私に尋ねた。「出るんなら、此处に踏み台を作ってあげる」と気が利く。

ベランダと居室との仕切りに、高さ四十センチほどの敷居（レール台）がある。入った時すぐ確かめであるが、私の脚では敷居を安全に跨ぐのが困難だ。もし居室側に踏み台を置いたとしても、ベランダ側に足を突いた直後に転倒するだろう。それ程にバランス不安定である我が身の様を、既にリハビリ訓練時から後遺症特有の体感で、しみじみ分かっていた。381 号室前の廊下でも散々試みたのだ。右足一本で立つ瞬間が危なっかしく、何かに掴まらぬ限り数秒も自重を支えられない。残念ながらそう知っている。納涼花火を望んだ宵の窓辺で長嶋氏を揶揄った同じ事が、まさに今の自分の身だ。

目の前の共用ベランダは、床幅が広く、向かいの手摺まで優に二メートル以上も距離がある。とても手が届くまい。日光浴付きの遊歩道でもあり、ヘルパー（介護スタッフ）にとって格好の物干し場にも

なる。プランター類を並べ置く入居者もいる。

「有り難いけど、転びそうだと私は、意気地なく応じるしか無い。

「じゃ、やめておく？欲しくなったら又そう言って」と拘らずノンちゃんが去った。

やがて私は、暮色の増す窓外を拒むようにガラス戸を閉め、生地 of 分厚いカーテンを引き、早々と天井灯を点けた。灯影の真下の最も明るい位置から動かず、唯こう思った。まだ七時を過ぎて居まい。今こうして此処に居る姿を、自分以外は誰も知らない。当然だ。そして独り居は、特別な状態ではなく、誰にでもある。だが既に、昨夜までの自分とは違う心持の段階に居るのだ、と。

活発に歩けず肉の落ちた痩せ尻は、只車椅子に居ても尾骶をゴつく感じ、自重だけでじんわりと痛み、また背中も車椅子のパイプ構造でこすれ、身動きするのが苦痛だった。

見慣れぬ暫定のベッドに、仕方なく身を伸べた。さっきノンちゃんに頼んで、落下防止柵の位置をずらしてもらい、どうにか身の反転（麻痺には難しい）が出来て、壁のスイッチに手は届く。夜勤巡回の来る九時まで、もう待って居られず勝手に悪いが消灯した。病棟と違い、外来駐車場を夜間監視するオレンジ色のライトの、窓カーテン越しに射し入る火影が無い。左胸を下に目を閉じた。熟睡した覚えは無いが、でも翌朝、部屋のごみ箆は空で、不要な段ボール箱も片付けられている事に、目覚めてから気づいた。九時、一時、五時、どの巡回時も目が覚めていないのだった。

リハビリ棟 381 号室で、小島・鴫崎の両氏が口を揃えて私の昼寝を、「あなたはベッドへ横になったと思った途端、もうスヤスヤ寝入っている」と驚嘆されたものだ。自分では全く昼寝の短い安眠に覚えが無かった。あれは後遺症のお陰かも知れない。

この施設に来てからだが、自分でも寝相特性がよく分かった。後遺症側の右腕や右肩を下に敷くと圧迫感で絶対に眠れぬが、逆に後遺症の無い左側を下にすると、「達磨さんが転んだ」も言い切らず、面白いようにストーンと眠りに落ちる。つまり、やがて月日の経過と共に、手足の痙縮（勝手な極度の筋肉緊張）の進行度合いがだんだん増し、ついには痺れと鈍痛が常に満ちて、どのように居ても立っても身の置き場が無くなるのだが、唯一、この左下寝相（自称カタツムリ寝相）に救われ眠りが来る、と。得難い安眠である。但し手放しに喜べぬ。ごく限られた短時間の極楽だ…再びふと、苦痛で覚める。いくら後遺症の泣き言を並べても、生ある限り其の苦痛は影の如くついて来る。

### 3 引っ越し後

こうして施設生活が始まったが、半身不随の身が今すぐ出来る事と言ったら「食う・寝る・眠る」以外に、前に述べた習慣的な寝具畳み、又せいぜい気張って居室の床掃き・洗面台とトイレ掃除・洗濯（三階パントリーに脱水付きが複数台）・シャワー浴・リハビリ運動の真似事くらいであった。他は全て誰かしらの人手を煩わさねば事が済まない。

今となってみれば、元のアパートに戻って自活するなどは実現の欠片すらない、夢のまた夢と思ひ知るのだった。しかし一方で、必要に迫られる事柄が、現実に派生して来る。

例えば其れは、身内（姉妹弟）の差し入れだけでは相済まぬ用件である。必須ではないが、有れば有るに越したことは無いもの（方便・利器）が身の回りに見えだす。つつがない従来は、手許に無いままそれで事足りていたが、今やそれが許されぬ虜囚の身同然だ。健常という通行手形を失ってしまい、施設外の何処へ行こうにも憚る浮浪状態である。

#### (1) ケータイ

卑近な一例を挙げるなら、通信手段だ。肉親や友人やケアマネと連絡を取る必要に迫られ、当初は施

設の二階事務所を介して済ませた。やがてそれが度重なれば、一々の呼び出しや必要なタイミングにも間断が生じる。伝言ゲームの心もどかしい綻びに同じである。

互いの連絡を、お手軽に密におこなうには、「手許に利器（携帯電話機）を！」と叫ぶテレビCMの塩梅で、今や小学生でも各自が携帯するという時代風潮に、古希の身で追いつかねばならなく成った。電話会社の最寄り店舗に連れて行ってもらい、ケータイ（こう表記され通用する）を契約、その現物を初めて入手した。誰でも知っている事であろうが、その契約の際にもし、万能薬の自動車運転免許証が無い（私）と、その代わりになる健康保険証・住民票・本人の写真入り公的身分証明書などを事前に要求される。住民票は、市役所の窓口まで行かねば手に入らない。本人写真入り公的身分証明書（例えば住基カード）等は極限られている。普段の生活に提示を求められた覚えもない。

これは西暦2018年秋時点の話であり、必要条件が何時どう変わるかは分からない。

そして現品入手後に、改めて周りを見回せば、入居中でケータイを持たぬ高齢者は一割に満たぬと知った。殆どは、息子や娘が一台持たせた上で此の施設に親を預けたのだ。

その人たちに訊けば、従来長年住んでいたという遠近の何処からも様々な事情があつてのサーコー施設入居であり、以後は預けた側の都合で、なかなか面会の機会に恵まれぬ方も多し。その補完の為にもケータイは双方向通信に必須品である。時と場所を選ばずに連絡し合えるのだ。廊下の途中やロビー片隅のソファーですら、掌に載る小さなケータイのテンキーを覚つかぬ指先でつつく姿や、じっと思いを馳せミニサイズ画面に黙して居る何らかの事情にも気づくのだ。

それに、男と女ではやや様子が違う。手提げ紐で口もとをメる、洪い柄の信玄袋にケータイも持病薬も入れ、常に持ち歩くスタイルは女性特有のものだ。一種のお洒落であるが、八十路を疾うに超す達者な妙齡だけに耳の遠い方も多し。食事の最中に、いきなり突飛な感じで着メロが響き、ブルブルと食卓で振動しようとして、当人は体調次第で一向気づかず手に取らず、歌謡曲『♪川の流れるように』が朗々と最後のサビ部分までつづく場合もある。同テーブルの婦人連もまるで気付かぬ…。

だが、ケータイは意外な場面で活用されている。同じ四階に入居の、同じ向き（南側）の婦人同士が自室から隣室へ電話する。気配で、まだ就寝前と解るのだ。

「もしもし、アタシ。ごめんなさいね、そっちも起きてた？…ねえ、見た？今、眠れなくて窓を開けたら、まあ、よーく澄んでんの上空が。まん丸いお月さまが中天に、ぽっかり！」の天文話に始まって、持病薬のちっとも効かぬ愚痴・横浜に居るといふ自慢息子の様子・訪室ヘルパーさん経由の館内情報（次に逝きそうな人の順番予想）・肌に残りがちな保湿剤の匂い・共同浴槽の薄汚れの件・白髪染めの工夫等、あれやこれや取り留めも無く始まって一時間以上のお喋りを楽しむそうだ。深更から時には東天へかすかな曙光も兆す。当館四階は遠方まで、眺望の利く高みである。

朝食前に三階パントリーで、そんな年長婦人の一人に捕まり、

「ゆうべ、見たかい？」と呼び止められ、親しげにそう訊かれた。階は違うが、お互いが南向き側に住むくらいの事は、何かの立ち話序に知っている。世間は、いや施設は狭い。

「何をですか？」と気楽に応じたら、腕を一つピシャリと叩かれた。

「何を、じゃないよ」と年下の分際の不心得を態度で諭され、「南の空に大きなお月様、東の空に昇り掛かるお日様さ、二つが一遍に見えただろうに？」と不思議がられた。

同じ南向き部屋でも、私の居る二階は雨除け用に突き出た大庇に遮られ、天体運行は望めない。四階と条件が違う。それを口で一々説明するのはヤボなので、黙す。

しかし、この婦人の感性は、『ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ』（万葉秀歌 斎藤茂吉著）と詠んだ、歌人柿本人麻呂の発見どおりだ。そのナイーブさに感心して褒め、

やがて色気抜きで気軽に喋る、皺くちやのガールフレンドと成った。彼女が四階自室窓辺で眺めわたす、一望の町並の中に起こる季節の諸変化、即ち、晩夏の盆踊り会場のざわめきや露店の火影、また春先なら或る朝に浮き出る白木蓮の点描、晩秋となれば緋色の粒々を纏う街路樹のハナミズキ、冬は突然に天を埋め尽くし舞い落ちてくる無数の雪片の流れ、それらを長らく独り眺めて身の冷えた口惜しき等、上州弁で濃い辛口を利く人だが一方では冗談好きで、何となく気が合うのである。

地元の著名な料理店で長らく仲居をつとめた経験で、目は肥えている。たまたま当館二階受付横の大鏡に映ったという人影を、「背骨縮みで腰曲がりの小ぢな老婆さんが居た。ハハハ（アタシ）ああやって、見えるんだ」と、自身を笑って突っ放すクールさもある。

## (2) 通院事情

リハビリ棟退院と同時に必須となった物の一つが、入院中の履歴カルテだ。それを正式に何と呼ぶか知らないが、退院直前にリハビリ棟医師の出番があり、一式を書き込み作成してくれた。やはり担当の土橋ナース手配かと記憶する。手渡された封筒の中を、私自身は改めて見る暇も無く、入所の席で施設管理者に心得顔で求められ、提出した。

そのカルテの形式的に必要なページを施設がコピーし、私名のファイルに綴じ込むと、元の書類一式は、当施設指定の医療機関へと渡る。それで私も、掛かりつけ医（主治医）を持ったことに相成る。これは、絶対に必要な手続なのだった。

ご存じの如く、世の諸ルールは既に定まっている。主治医の紹介状がもし無ければ、投薬はおろか、より高度な医療機関での「受診手続きは不可」と、門前払いである。

そう我が身で知ったのは、入所後暫くしてノンちゃんに、「来週の水曜、午前九時、皆で一緒に行くからね、早めに集合。覚えといて」と、簡易通達されたのである。各人の健康保険証類も事前に二階事務所がコピーし一括保管、いわゆる「段取り八分」に抜かりはない。

当日午前の受診該当三名を乗せた施設名入りバンが、ノンちゃん引率の巧みな運転でピクニックの如く向かった郊外に、やがて見えたのは白壁の建物である。周りを農地に取り囲まれた保養所に見えなくもない。民家数軒も近くに散在した。

すでに空風の赤城嵐が濃い青空の下を、初冬の野へ吹き立つ時期である。地方県道から畑地を横切るせまい鑰折れ続きの脇道にゆっくり曲がり入ると、車窓をハタハタ打つ風音がものすごく、枯れた作物や植え込みが片側にかしぎ揺らいでいる。目当ての建物へ近づく間も、畑から舞う砂ぼこりが、遠景背後の黒っぽい森並を震ますほどだった。

「今、車を回してくる。此处で降りて待つて居て」と、正面玄関手前のスペースに我々を取り残してノンちゃんは、帰路の方便に具合好い位置へと駐車しに行った。もし短時間でもこのままの駐車では、他の外来患者の到着を邪魔してしまう為である。だが、傍らを車が離れた途端、音立ててどっと建物沿いに押し寄せた強烈な風圧は、只立っているのもやっとなで、しかも凍える程に肌身を切っていく。居竦んで震えてしまうが時期的に、皆まだ防寒着ではない。

一方、玄関先は雨水除けの為だろうが、危うい登りのスロープ付きだ。それでノンちゃんが、「（動かず）此处で待つて居て」と言った訳が知れた。ガラス張りの玄関内に、当院の車椅子が二つ見えた。「病院で借りるの」と、事前にノンちゃんに聞いている。

施設職員が普段、「イーさん」と呼ぶ四階の住人、さすらいの素寒貧ギャンブラーこと井伊氏の薄着姿を、先ずはあの備品で院内へ入れよう。杖を突いて、車椅子を押し戻りイーさんを安全に坐らせるのを、同乗のご婦人に手伝って貰っている所にノンちゃんが足早に戻った。



「ありがとう、大丈夫？」と彼女は、杖にすがる私に一言そう訊くや、車椅子のイーさんを素早く引き取って玄関内へと押し出し、「二人とも、此の上りに気を付けてよ」と振り返る力強い声で、こちらを小まねいた。すぐに廊下の角から待合室に後姿が消える。

一方、瞬間的な烈風に背を突き飛ばされ、重心の傾いだ婦人を、風下側で受け止める杖の私が後遺症の右掌で、その年長婦人の伸ばす左掌をつかんだ。後遺症のある私の右手は、そんな自在でない筈だが、この時は何故か動いたのだ。すると相手の触れた左掌が極めて印象的だった。絹製クッションの如く柔らかで、しっとり温い。私の掌が、後遺症で体感温度が下がっており、触感が狂っていたかも知れない。しかし彼女の手に確かな愛しさを覚えた。折々に男の持つ、いい加減な性衝動ではなく、他に替えがたい大切な掌と意識した。

その印象が後々も長く続き、既に述べた如く、皺くちやのガールフレンド誕生に繋がるのだ。数年のうちに、急速に痙縮の右手が諸感覚を失うにつれ、不思議にも健常な方の左手に、彼女の掌に最初頂いた「大切な印象」が乗り移り、痺れも無く生き生きと覚感していた。そういう経験が、他の方にもあるのかどうか、残念ながらお聞きしたことが無い。

この時は唯、二人吐嗟に並んで突風の中に立ち、互いの手を離さず握ってスロープを一緒に登り、玄関の自動扉を潜った。手を貸した筈の私の足取りがむしろ危なっかしく、婦人の手を頼り、更にきつく握っていた。背後で自動扉が閉まると、嘘のように風音は静まった。

玄関内の車椅子置き場のとなりに座椅子が二つあって、二人ほっとして座る。年長婦人の手をまだ離したくなく、そのまま握って膝に置き、表の気象の凄さなど熱心に話していたら、待合室からノンちゃんが老人二人の居所を案じ、様子見に来た。もし一階通路を待合室と逆側に入ると、当院経営のデイサービス棟に繋がっているからだ。

「この病院の院長は、先代の息子でまだ若い。二代目に成ったのは最近」と、情報通でもある年長婦人に待合室で親しく教わった。彼女は、「サーコー」入所直後に緊急入院の経験が有る。つまり、当時流行のインフルエンザで咳が止まず、施設管理者に相談したものの主治医の紹介状が無く、公立受診手続きに手間取っているうちに軽い肺炎を併発したが、受付時間外で公立への入院は不可、それで時間外をも受け容れるこちらに世話になったのだという。聞いた実際の経緯に驚く。亦、その経験談によれば当院の医療機器類は、最新設備の公立に比べればやや旧式である。

そう聞いて、まだ公立を退院したての私も、やや古臭い感じの待合室を見回し頷いた。順番待ちの外來患者が所狭しとばかり大勢詰めて居る。なのに、もっと奥側にあるという各診療科や診療機器とを結ぶ通路配置が片側に一本しか無く、且つ狭く、動線（経路・軌跡設計）への配慮が不十分だ。受付・診療・支払いに関わる一連の流れの回転効率が見るからに悪い。

恐らく、この建物自体が当初、急ごしらえではなかったかと思われる点は、トイレの配置などにも如実だった。ギャンプラーのイーさんが車椅子上で尿意を催しても、狭いトイレへの通路入り口の、最初の曲がり角で車幅が闊えてしまった程だ。

よくよく話を聞けば当院の成立に関して、領けぬ歴史が無い訳ではなかった。

つまり、嘗て剛腕で知られた名外科医の前院長（初代）が、元居た当市内中心部の某有名私立病院から、内部造反（？）によって追い出された結果、新たに此の場所を選んで私財を投じ、自分名を冠した新病院を建てたのだと聞き、「嗚呼、そうだったのか!」とたちまち納得がいった。即ち、なぜ車が県道から逸れて意想外に畑の中のくねる小道を通らねば当院に辿り着けぬのか、又さつき接近中から遠く見て取れた当院の敷地全体が、若し鳥の眼で俯瞰すればなぜ不自然にデコボコと虫食い状に広がっている

のか等を、いま改めて考え合わせてみた。即ち、いまだに当病院立地に必要十分な用地買収が、何らかの疎外要因で、完全に済んだ状態にはないらしい。待合室の窓から、すぐ裏手に入組んで広がる畑地や奥の土手らしき物を眺め渡し、そう推測できた。

だから到着の際、ノンちゃんが我々を一時置き去りにして、飛び地へ駐車しに行かねばならなかったのも彼女の不手際ではないと理解した。この病院を立地観点から完全なものにする為には、二代目院長の経営手腕が今後ひとえに問われる筈と直感した。順番待ちですっと暇なのである。

初めて訪れた待合室の患者が、そんな不遜な思いに浸っていると、ノンちゃんが傍らに来た。片隅の受付窓口で先前から何かの用を済ませていたのだが、

「イーさんの面倒、見ていてくれない?」と頼まれた。

本院とは別棟にある薬局へ、処方箋を事前に届けておき帰途の薬待ち時間を節約したいとのこと。異存は無い。ご存じの通り「薬・医」分離策と呼ぶべきか、薬はその処方箋を受け付ける薬局で支払い迄を済ます。当院にも分院の如く薬局棟が付いているのがさっき見えた。

さて、杖にすがって立つ私が、壁際にへばり付いて居るイーさん（人混み嫌い）の、我慢しきれぬとの要望で小用に連れて行こうとしたら車椅子が、先述の如き動線不具合に遭遇した。年長婦人（仮にミセス小貫とする）は奥の何処かで診療中で今居ないし、ちょうど私もナースに通路から名前を呼ばれた。イーさんは、自助努力に任せるしかない。

ナースの一人が、私の杖や脱いだ上着を甲斐甲斐しく仮置台に載せた。もう一人が私のカルテ（リハビリ棟伝来）を白衣の医師に差し出した。座って居たその医師がカルテを開くこともなく、パソコン画面から身を回してこちら向きに成った。私と目を合わさず、脇のベテランナースの簡潔な説明（脳梗塞）を受け、頷いた。まだ四十代始めであろう。人を自然に威圧するような貫禄は無く、内向的人格の第一印象である。目立たぬ細身の小柄だが、周りを出入りする老練ナースの補佐具合で、この人が院長（二代目）かと窺えた。待合室の掲示板で見た本日午前の当番医名が、当院創立者と同姓である。その辺に転がっている類の姓とは違う。ミセス小貫が気安く呼んだ、「まだ若い倅」という当人だろう。

「宜しくお願ひします」と、私は一つ頭を下げた。

「顔色が良いわね」脇から観察のベテランナースがそう応じた。当たりだ。

最初のナースが、私の杖と上着を返してくれて、気が付けばそれで院長診察が終わりなのだった。医師はもう向こう向きに成り、パソコン画面にはちゃばちゃと何か打ち込んでいる。電光石火の早業診察だろうか。そのまま私はナースに導かれて行き、廊下の奥側にある広い診療室で、より多人数が行き交うナースの手で数本の血液採取、そして間口の狭い機器室で頭部スキャナーを受けた。公立病院では三十分も要した密室のスキャナーが、当院では意外に…早い。後日、別途カンファレンスを受けた覚えもない。脳も内部空洞のまま「異常ナシ」であったのだろう。

通院は、これ以後も二回ほど経験した。無口な若院長はパソコンに向かったままの診察・面談が相変わらず素早く、応対面の対話不足はベテランナースが心得顔で補完した。亦、冬場のインフルエンザ流行時には、サーコーから一步も出ずに集団予防接種の出前を受けることもできた。これも決まった主治医の居る有り難さの一つであろう。

ガールフレンドのミセス小貫は半年後、街路樹に新緑が鮮やかに映える頃、再び咳き込んで畑の中の私立病院二階棟のお世話になった。居心地が良いのか、なかなか帰って来ない。

後日の余談になる。勿論ミセス小貫は二週間ほどで無事戻ったが、暫くこもった四階自室食の間に老けたらしい背中がもう少し曲がった。目の周りも明らかに落ち窪んだ。その三年後の春先、三階エレベ

ーターホールに或る一夕、彼女がひとり座って居た。その光景が、あの初通院の際にミセス小貫と一緒に坐った待合室手前にそっくりだ。つい懐かしくて、その手を取り、強烈な空風の中で得た忘れ難いエピソードを披露し、ロマンに同意を求めるや、「フン」と鼻で笑われた。

「覚えてないね」と、誠につれない返事、「あんた、此処に入って何年？」

「確か、四年目かな？」

「アタシなんか、もう十年以上も居るからね、パッパラパー（ボケの意味）さ」

「でも、こっちは初めての通院で小貫さんと一緒に行きました。病院の玄関前にスロープがあって、そこを二人で手をつなぎ助け合いながら越えたでしょ？玄関ソファで休んでいたら、ノンちゃん心配して二人を探しに来た、誤ってデイサービス棟に行ったのかと」

「ああ、あすこは元々の配置が入組んでいたね」

「薬局も別棟にあった。駐車場も離れていたし」と私は記憶を促がした。

「ああ別だった。アタシは、個人であそこの薬局に寄ると、ノド飴があって何時も四袋買っていた。でも、今はもうあそこは無いよ」

「え？」その意味が解らなかった。何時も感心するが、頭の回転の速いご婦人である。

混み合う待合室の、裏手に広がる畑の向こうに土手が見えたが、あれは谷田川の堤だそうで隣町との境界線にもなっている。川向こうは果物づくりが盛んな土地柄で、当市とは別の財政豊かな行政区域である。あの私立病院は、そちらに新天地を求め既に引っ越した、ミセス小貫の最新情報では…。つまり、あの内向的印象の若い二代目院長が、言ってみれば父親譲りの不便な造りに見切りをつけ、新病院竣工を丸ごと背負い歩き出していたのである。意外な早さだ。

又、なぜ近頃になって当施設の主治医名が訪問医療専門の某クリニックに切り替わり、入居者個々人も新たな医療形態にサインを求められたか、その理由の一端が知れた。

#### 4 リハビリ棟再訪

この段は、少し月日を遡るような感じになる。サーコーに入所して暫く経た頃、地域支援室（公立病院内）のソーシャル・ワーカー嬢に電話連絡を取った。「脳梗塞の後遺症が安定化する」と公的に謳われるらしい目安時期、すなわち退院後三カ月が近付いた為だ。連絡を取るよう、退院間際にアドバイスがあったのだ。早速、折り返しに回復期リハビリ棟一階の事務係から、当方の希望日時問い合わせ連絡がきた。『身体障害度の測定』を行うのである。健康保険証・診察券・認定申請書の三点セット持参で、十二月初旬の月曜午前九時にリハビリ棟を再訪することと相成った。

ちなみに、この前後のPC（パソコン）日記を見ると、「右顔面が強ばり、口も引き攀れて開けにくく、鼻詰まり声となる。物を噛めばアルミの金属臭が濃い」とある。それに亦、「寒さのせいかな右半身に痺れと痛みが増し、バランスが悪く朝のベッド起居に難あり」と記されている。

具体的には例えば、座る為には左右の臀部が尻の下の物を同時に平均に感じ取ってその電気信号が、脳に送られ異常無しとして処理され、そののち座って安定を得る。はっきり言って面倒なプロセスを経る。だが右半身不随で、尻の双丘の片側が感知不良、通電不足なのである。

従って臀部左右のバランス感覚が低下し、とうとう或る朝、無用な力みでベッド縁から滑り落ち、ストンと尻でゆかに着地、幸いにも怪我無しで済んだが、そこから何かに掴まって立つまでが他人様に言えぬ一苦勞。嘗て入院中には一度も無かった失態に、身の危険度が増している。

そこで、リハビリ訓練中におこなった如き後遺症補完の必要に再び迫られた。今度はより切実である。何とか自分で工夫せねば、毎朝起きる度にベッドから芸も無く滑落し無駄骨を折るだけ、それでは始ま

らない。だから、自分の寝場所で最も合理的且つ簡易な起き上がり方を試行錯誤し、見つけた方法は以後習慣的に踏襲し出す。朝起き上がる都度、「あ、身体がまだ忘れていない」と自分に言い聞かす。一種のささやかな自己防衛だが…ふと伸びを打つような折にも、我が影同然に付きまとう後遺症は、その防御に関する反射的補完を身に沁み込ませておかぬ限り、半寝ぼけの覚めたてや深夜の夢見の最中も、キリキリ激痛を發する痙攣を用意し待機中、そう知っておく術が要るようだ。

計測予約日の定刻朝九時、リハビリ棟一階に専任トレーナーで最年長の赤坂氏が私を待っていて居た。三カ月ぶりの再会である。この方が講師中で唯一人、自転車通勤である事や駐輪する位置を、入院当時 381 号室の窓辺から眺め下ろし知っていた。まだ低くて眩しい旭光の射す中を、スポーツ刈り頭の氏が、敏捷な健脚のゆったりした漕ぎ方でスーッと影を引いて来るのだが、肩に小さなバッグ一つ掛けている。三階の高みから毎朝見られていた等とは露知らぬ筈だ。

「計測には約一時間掛かります」と最初に言われた。手抜きは、決してしない方なのである。私はその時ふと思い出した。嘗て、同氏担当のカリキュラム中に、固まり掛けた痙攣部の入念な按摩施術があって、揉みの強烈なそれを受けると、三日ばかり激痛を経た後に平癒し、手足の可動が広がり楽になる。それが由来なのか他の講師が、「ほぐしの赤坂」と密かに呼び敬っていた。今の私はもうリハビリ棟を退院・卒業したのだから、その施術対象者ではない。

一階訓練場の片隅に、他の邪魔にならぬように計測台の準備が整っていた。其処で、言われるままに私は後遺症で利かぬ身をさらし、身体各部の相当な項目数にわたる一々の可動域を、赤坂氏が几帳面に計器をつかって実測した。一々の数値を所定の用紙に書き込み、最後まで丁寧な仕事である。計測項目が全て済み、赤坂氏がファイルを閉じた。

その手がファイルを脇に一旦置き、次に私の右手を取り、痙攣の上腕から施術アプローチを始める。二の腕へと独特のリズムで揉み下ろしてゆく。痙攣を眼前にして、今やらずには気の済まぬ同氏の職人魂だろうか。迂闊に拒否できぬ真摯さを、力強いその指技が加えた。

入院当時の、まるで大うねりの波間に抛りこまれ揺らぐその感じを右腕が覚えている。今回はそこに、リハビリ訓練現役時と違う感じの刺激が、電氣的にピリピリ起きた。痙攣度がこの三カ月間で増し、今揉まれたら激痛が走る筈なのに、その真逆で、眠気をさそう心地良さを同時に催す。不思議だが、実際、私は一瞬で寝入ってしまった。その心地良さに後遺症の身が飢えていた。五分だったのか、いやもっと短かったのか分からぬが、全てが消え深い眠りだった。ふと目が開き、現在の居場所に気付いた。赤坂氏は既に遠く離れており、私の頭が胸に傾き、意味の無い夢を追っていた。

覚めた杜子春（異国の伝奇噺）の如く見回すと、リハビリ訓練室内は嘗て見知った通り、ペアを組んだ患者と講師が其処此処に散って訓練プログラムをこなし合っていた。平行棒・マット・昇降踏み台・脛に嵌める補足具・マッサージ台・PC 画面で何かを確認する講師・冗談を言って笑い合うペア・やや離れた講師の立つ所へと一歩ずつ進む患者・危うく抱きかかえられ車椅子に戻される姿など、嘗ては毎日親しんだ光景が広がっている。此処に、もう私の席が無いだけである。

手指の講師あの「教授」が、遠くのテーブルから授業中の患者越しに、こちらへ手を軽く打ち振っている。私は車椅子を止め、自由な左腕を高く揚げ、その場で一礼した。

そして待つことも無く、リハビリ棟担当医（「障害程度認定申請書」を作成する）の簡素なカンファレンスの後、リハビリ棟事務係から計測手数料の請求を受けとり、病院本館出納窓口で支払った。メて 220 円也で、キツネに摘ままれたような値段だった。

## 5 温泉宿

じきに、審査結果『身体障害度2級』との連絡がリハビリ棟事務係から来て、次は市役所の然るべき窓口へ行って、『身体障害者手帳』発行に必要な手続きを踏んだ。

この手帳には、本人の顔写真も要る。町角の証明写真用撮影ブース（ボックス）の一つに坐った。最近写真など撮った覚えもない。即座のポラロイド現像で、ぎょっとさせる恨み眼の老人顔が、2枚も出てきた。ミセス小貫が、サーコー施設二階事務所脇の大鏡に偶然映った自身を、「背中が縮んで腰の曲がった、小さなお婆ちゃんが居た。アタシ、あんな風に見えるんだね?」と、ぼやくその歎きを、嘗て横で笑っていたなんて…今や自分が恥ずかしい。

そういう彼是の用事や日々の出来事のお陰で、施設生活に心身が漸く慣れた頃、かねてよりの話題で、私のリハビリ退院後を一つの目安にする温泉行の件が復活した。嘗ての職場同僚で且つ市内近場に住むもの同士が例年いつも三名で行く、旧来から続く定年退職後の気楽な習わしである。互いの歳の差も三つ以内であり、同世代なのである。

但し、今回は尚も脳梗塞再発を恐れるべき時期に、「物見遊山を兼ねる温泉一泊旅とはこれ如何に?」の怯む気分が、我が身に無くは無かった。但し、命乞いの真摯な念も無い。

入院中より医師処方<sup>けつあつこうかざい</sup>の<sup>けつえき</sup>血圧降下剤（<sup>けつえき</sup>血液サラサラ薬<sup>やく</sup>だったか?）を欠かさず飲み、もはやその定めを逃れられぬ身と諭されている。飲み忘れれば一巻の終わり。当然、その覚悟である。この身体は、過ぎしあの発症の日の如き名状しがたい<sup>おぞけ</sup>怖気の襲う<sup>しんし</sup>麻痺を、二度と<sup>つたいげん</sup>追体験したくない。けれど、如何に日頃の健康に<sup>こころくだ</sup>心砕こうとも、<sup>のうお</sup>底知れぬ脳奥で血管が再破裂し<sup>い</sup>バツタリ逝った事例を、「<sup>でんげき</sup>電撃や<sup>はま</sup>浜の<sup>まきご</sup>真砂は<sup>たね</sup>尽きるとも世に<sup>つ</sup>イチコロの種は<sup>かじ</sup>盡きまじ」と聞き<sup>かじ</sup>蓄っている。

結局フィフティ・フィフティ以下なのだ、生と死との拮抗<sup>きつこう</sup>バランスは…。一寸の<sup>いっすん</sup>光陰<sup>こういん</sup>軽んぜざるべからずで、かろうじて偶然に釣り合っている<sup>はかな</sup>儂い状態に他ならぬ、と発症時の実感が再び<sup>よみがえ</sup>蘇った。その釣り合いは<sup>じんち</sup>人知の<sup>おほ</sup>及ばぬ所であり、<sup>よう</sup>理屈で探れぬゾーンかもしれない。要は、<sup>そまつ</sup>粗末に扱わぬ<sup>あつか</sup>代わり後生<sup>ごしょう</sup>大事にしまい込みもせず置く、というところか。

宿泊先は群馬県伊香保温泉と決まった。榛名山の南東斜面に位置し、<sup>てんか</sup>天下の名湯である。メンバーの一人が早速電話予約を入れ、<sup>かひ</sup>車椅子使用の可否も問い合わせしてくれた。その<sup>こた</sup>忘えは、

「通常の和室にベッドも一つ入れた部屋を用意できるそうだ。どうする?」と、当方の後遺症状態に配慮し、旅館側が気を利かしてくれたらしい。

それは大いに有り難いが、私が選択すべきは「否」だろう。せつかく気の合う三人で行くのだ。一番の楽しみは、<sup>たたみ</sup>畳に伸べられた<sup>ふとん</sup>布団や<sup>ゆかた</sup>座椅子の周りに、酔った浴衣の身をごろごろ並べ合い、従来通りちっとも<sup>つじつま</sup>辻褄の<sup>しんこう</sup>合わぬバカ話を<sup>くちげんか</sup>深更まで喋り合う。果ては意地<sup>くちげんか</sup>張り<sup>くちげんか</sup>の口喧嘩もする。だが、一夜明けて障子に<sup>しょうじ</sup>陽光の射しこむ頃は、昨夜の<sup>こたわ</sup>拘りの切掛けが何だったか等すっかり忘れ果て、寝乱れた<sup>しょうじ</sup>布団に道路マップを広げ、<sup>きと</sup>帰途の<sup>けんぶつきこうほ</sup>見物先候補を話し合うのだ。最長で往復六泊七日の<sup>おうふく</sup>四国ドライブ旅を、この三人でこなした<sup>かたむ</sup>経験がある。それが一昨年夏の収穫だ。

さて、そういう経過があつて出発当日の朝、先ずサーコー施設に寄って貰い、トランクに車椅子を積み込んだ。お二人が運転席と助手席、そして私が後部席を占める。乗ったのはハイブリッド車で、走行音が極めて静かだし且つ振動も少ない。出発し、やがて初めて分かった。右半身に感覚の乏しい後遺症は、走行中のクッション柔らかな座席に真つすぐ上半身を立てておく姿勢の保持が、意外に難しいのだ。即ち、<sup>とじょう</sup>ドライブ途上の車線変更・交差点信号で繰り返す一々の<sup>かたむ</sup>停発車・地形による路面左右前後の傾き

具合・瞬間ごとに変わる減加速・そこに派生の慣性力ベクトルの働き、それらが不安定な身を連続的に捉える。船上のピッチングかローリングの如くに身が揺られる。

以前、施設見学の際はタクシーに肉親三人で詰め合って座った。この間の初通院では、ミセス小貫と私が、より身体の不自由なギャンブラーのイーさんを右脇に押してピクニック弁当的に詰めた。いずれも短時間のサンドイッチ状態、それで揺れの実感に乏しかったのだらう。

今回は広い後部席に独り、寄り掛かれる相手がいない不安定さが相次ぐ。身をなるべく右の片側に寄せて座り、シートベルトを手繰り寄せてしっかりと捕縛し、揺らぎを安定させる他ない。前方の視界は当然ながら狭まってしまう。身を都度ねじって、車窓の左右を眺めれば良いのだが、後遺症は首の回る可動域も狭めている。「右向け右」の基本行為が即座には厄介と既に経験で知っていた。

流れ去る車窓風景の片側だけを見送るのが、痙縮の痺れを感じずに居られて一番楽である。前列のお二人に、途中見つけた物をあれは何かと問いたくて、指さそうとして瞬時もたつく間に、その場所をとくに通り過ぎてしまう。序にだが余談で言えば、右手を胸から斜めにきつと伸ばし上げるナチスの敬礼、「ハイル・ヒトラー」等は先ず不可能、当時なら銃殺ものだ？

それでも、ドライブ途上の頃合に昼食を摂るまで約2時間、沿道の移り変わる眺めにつくづく見惚れた。室内ばかりの最近、風景の中を切り裂き駆け抜けるような小気味いい疾走感とは全く無縁である。今や、彼方の空に薄くシルエットが浮かぶ榛名山を目指す半日行程が、どれほど新鮮であることか！途中には初に立ち寄る工場見学、その生産ラインに隣接の直売場で、地方名産の「カリカリ小梅」を試食し、車椅子の膝に乗せ瓶詰の梅ジャムを買ったりした。

ここで、正直に書いておかねばならぬ厳しい現実の件もある。他でもない食事だ。

友人が見繕って、車椅子でも動きやすいスペースのある蕎麦店を選んでくれた。入口の最寄り位置に駐車し、けれど車椅子は出さずに、そこから五、六メートルを杖歩行した。落ち着いた雰囲気の内店で四人掛け席に座り、選んだ物は三人とも上天ぷら付き蒸籠。混み合う時間帯はちょうど終えている。丈長い割箸の姿も別格な蒸籠セットが待つほども無く出た。アツアツの大きなエビ天と季節の野菜揚げが馥郁と香り立ち、色濃い本格派の地蕎麦が波打っている。友人二人は早速、遠慮なく音立てて続けざまに啜り込んだ。衣越しの太いエビの弾力に舌鼓を打ちあう。

さて私も蕎麦が大好きだ。右手に割箸を握らせ、太い地蕎麦を一トすくいしようとして、リハビリ棟の訓練時代にも無かった難物が、今や目の前にあると直感した。箸先で適量をつまんで、盛りから掬い上げ、猪口につゆに浸し、それを口もとに戻し、ぱくりと啜えながら一気にツルツル喉奥へ啜り込む。その世慣れた一連の反復動作に、先ず第一歩目で躓く。つまり、後遺症のある右腕が尻込みした。その状態をより正確に言うならば、腕自身が反射的に、考え込んでしまったのである。大きな蒸籠セットの載って居る広がり自体が、私の腕の可動域を超えている。それを、右手が知っていた。

むろん、友人二人の見せる盛んな食欲の前で、独り怯んでなどいられない。

軌跡のブルブル震え気味に定まらぬ箸先を突っ込んで、蕎麦を一ト山掬い、つゆに浸けた。咄嗟の後遺症補完をこころみた妙な右手の動きに、友人がふと箸を留め、こちらを見ている。私は、平気を装ってつゆの飛び散る蕎麦を持ち上げ、一気に啜り込んで見せ…見せ…たかったが、顔面の右半分も後遺症だ。頬の筋肉が引き攣れる。それが障害要因となった。一ト口でツルツルッと啜れるワザ、日本人なら誰でもおこなえる文化的仕草が、「もはや不可能！自分の口は」と、自覚し難い大ショック。つまりモグモグ常識外れに数多く噛んでやらねば蕎麦の腰は咽喉の関所を厭がり、『腑に落ちない』のである。

エビ天の荒も遠い、しかもエビ天の長いサイズを蕎麦つゆに浸すバランスの難しさ。

先を急ぐ旅でなし友人は、私の手間暇かかる蕎麦食いを、じっくり待ってくれた。

サーコー施設でも月に一回くらいは、昼食にソバかうドンの供される日がある。それを、たいして支障もなく私は摂っていた。但し今思うに、それはつゆに浸っているか又は数センチに短く切ってくれてあり、一気に吸り込むのではなく、都度一々噛んでいた、無意識のうちに。サーコー内では実は、きつと高齢者用に誤飲防止策がとってあるのだろう。それで私の如くに後遺症で片頬の筋肉がしびれ、麺類の吸り込みに適さぬケースにも丁度対応するのだ。

友人二人は、私がおもたもた食べながら新たにささやかな再発見をしたとも露知らず、漸く割箸を置いた健啖な回復ぶりを眼前にして、

「さて、出発するか?あと半分だ」と、満足気に立ち上がった。

これまでに方々の温泉地を三人で訪ねた経験がある。もちろん各所で車椅子優先の専用駐車表示を見かけたが、その指定ゾーンに自ら入れたのは此の老舗温泉旅館が初である。広い駐車区域内で、玄関真ん前に優先表示の空きが数カ所あった。下車するや、伊香保らしい険阻な崖勾配を吹き降ろす山風がしんしんと身を刺すほども冷たく、手荷物のみを有り難く整えた。寒い所為であろうか丁度チェックイン手続きが早めに始まっており、我々は頃合の到着時刻であった。

今どきの情勢下、此の大きな和風老舗館も単独での経営は成り立たず、全国的ホテルチェーン傘下に加盟し、そのノウハウで運営されている。各部屋は既に夜具がしき伸べられ、茶菓子も浴衣もタオルセットも客数分が整っている。朝夕二度の豪華なバイキング料理を目玉として、時間限定の飲み放題も付け、老若男女を手頃な宿泊料金でもてなすのである。

また、男女別大浴場は、或る限られた清掃時間以外は深夜でも早朝でも常に開放中、そして朝夕の食事はチェックイン時に自由選択した二種何れかの開始時刻にバイキング会場となる大広間へ行けば、各テーブルにそれぞれの部屋番号が示されている。

周知の事であろうから、これ以上のくくだしい説明は要るまい。我々三名も、各温泉地では此れ迄に散々お世話になった馴染みの宿泊スタイルである。

しかし、以下の点を今少し書いておかねばならない。この掌編のテーマで『変容』という題材の所為である。バイキング会場の飲み放題で、したたかに酔い且つ最低朝晩に三度は温泉に浸かるのが一泊の不文律の楽しみであったのだが、そうは問屋が卸さぬ。今回、私の身が後遺症持ちであるという一点が鎌首を擡げだすのは投宿部屋に着いた直後からだ。

継ぎ足し感のある老舗らしい長い廊下を経て、車椅子で曲がり入った三階の和室は、北向きの大窓越しに、夕暮れ近い湯の町伊香保の旅館群やその隙間に隘路で入組む坂道などが窺え、異郷の旅心を慰めてくれる。友人二人は窓辺で缶ビールの栓を抜いた。無事到着すれば即座に無礼講開始である。

私は杖歩行で寄ったクローゼットに上着を預け、久しい尻もち感覚でさっそく旅館の浴衣に着替え、敷布団に寛ぐ身を投げ出しかける。そこで、『おい待てよ…』と暫しの躊躇。このまま布団に寝て背伸びしたら、さぞや気が晴れ晴れするのは必定。だがしかし、その後が問題だ。

今更思うに、発症して入院中～退院以来、これまで一遍も畳の上に寝そべった覚えが無い、全てベッドでの起居である。つまり経験上から言って、手の届く範囲につかめる柵が無い限り、半身不随の我が身が無手では起き上がれぬ。それを、しっかり思い出した。

私は、しかし是非にも寝そべりたかった。友人二人の居る方へ一声こう呼びかけた。

「ちょっと一ト寝入りするね。後で手を引っ張って起こしてくれる?」

「あ、いいよ」二人は何も疑わずそう応じ、乾いた喉に先ずは冷えたビールを流し込む。保冷バッグに入れて来た分だ。この宿は、酒類の持ち込みが自由なのである。

夕食前に恒例のオート風呂浴びは、その結果があまりに惨めすぎて書く気もせずに萎える。

しかし本来、榛名山南面の伊香保が誇って好い絶景は、上毛カルタにもある如く『すそ野は長し赤城山』の雄大なパノラマ斜面である。まるで眼前の世界が赤城一山ごと長々と傾いて見えるのだ。しかも、そこに奥白根などの銀嶺が奥まって重なり、虚空に白々と輝きあう様は、空気の乾いた冬季ならではの白眉であり、神々しいほどだ。

それらが皆、当館屋上六階の露天風呂からも湯煙の向こうに望める筈…なのだが、それには先ず、脱衣場からガラス戸を潜って湯殿へ入らねばならぬ。いや、それ以前に自室から出て屋上階までの廊下とエレベーターを、これでもかというほど何度も継ぎ足して様々な段差のある経路をたどる。つまり、友人が段差の都度、車椅子ごと私を担ぎ支えてくれた上だが、お二人はもう途中で汗まみれだ。

歴史が古くて大きな老舗館なので、途中は迷路のようにくねって遠いのである。そうして到着した屋上階の脱衣場から漸く湯殿に踏み込むや、ザアザア音立てて湯量の溢れかえる床面は、温泉薬効成分によってヌルヌルのスベスベだ。注意書きがあり、五体満足な人でも転倒する。況して私如き者が、一歩でも立ち入ると其処はもう補助杖の利かぬ別世界。杖先端の滑り止めゴムが、全く役立たぬ。命からがら、洗い桶に瘦せ尻を乗せ、床を蹴って滑らせスケート的に脱衣場に逃げ戻る。友人二人は、とっくに湯殿を露天湯へ出て、寒気に立ち昇る湯気と彼方の眺望を満喫中である。「此処の湯は、硫黄分が強くてタオルを浸し過ぎると黄濁する」と後で友人が驚いていた。

私も大収穫ではあった。即ち温泉成分は障害ある足の滑り止めにならない、と。

お次は、いよいよメインイベントの『飲み放題付き』バイキングの開始時刻。「今や遅し」と部屋カギを持ち、車椅子を押されて会場入りすれば凡そ七、八十種以上のセルフサービス方式の料理・デザート類・飲み物コーナーが壮観。これこそノウハウの動線沿いに所狭しとばかり並んだ辺りを、浴衣姿の旅客の誰もが、その手に取分けプレート（お盆）を持って行き交っている。温泉保養ムード絶頂で、一見静かながら誰もが興奮している。これが生きる喜びでないとしたら一体何であろうか？

友人は、私を席取番（その必要はないのだが反射的行動である）、つまり留守番代わりに指定席テーブルに据え置くや、役割分担で一人は先ず生ビール供給機へ、もう一人はお飲み類コーナーへと散った。言わずと知れた互いの段取りである。今回は私が役立たずの為、生ジョッキを手にとり一同が満面笑みの、「乾杯！」開始迄に、やや手間取ってしまった。

しかし、今宵つつがなく三人で冷えた生ジョッキを軽く打ち当て合えたのだ。まさかの脳梗塞発症以後、こんな嬉しい時間が再び我が身に巡って来るなんて、一度も願った覚えが無い。好きな物を好きなだけ口にする、それ自体があまりに図々しく身の程知らずというものだ。

発症前は、一年三百六十五日の飲酒行為を当然と思い欠かしたことが無い。起きしなにビールを手探りした朝もある。しかし今は、特に酒好きだった覚えが無いような気がする程度だ。なぜ毎日飲んでいたのか、飲まずにいらなかったのか？実はさっき、到着した途端にビールのプルトップを友人二人が抜き合う姿を、よそ事のように脇から眺めていた自分なのである。内心それが不思議だった。

しかし今、事ここに至って宴会場で友と大ジョッキを掲げあい、久しぶりに酒の味を楽しめるのだ。あの日、レスキュー隊が大声で名を呼んでくれて搬送し、命拾いをしたお陰である。

生ジョッキを口に当てて傾けたら流れ込んできた液体が、途端に異物的刺激で、『ビールって、こんな味だったか？』と身が凍ってしまった程も苦渋かった。アルミニウム臭が喉から鼻に広がり、しかも液体の冷たさに頬周りの筋肉が引き攣った。口全体が動かなくなったのである。とてもじゃないが連続嚥下



など無理で、一口目を飲み込むのがやっとの思いだ。麻痺気味の右手に<sup>おも</sup>重る、厚いガラスジョッキを卓上に戻さざるを得なかった。正直、二度と手を出す気がしなかった。

何が我が身に起こったのかと<sup>ぼうぜんじしつじょうたい</sup>茫然自失状態で、友人二人を眺める。

お二人は、「グビグビ、グビグビ、ウググ…プハーッ」とジョッキ半分以上も一気に空けてしまい、もうマグロ刺身に箸を伸ばし、ワサビをたっぷり載せた一品を口に運ぶ。彼等はすでに部屋で飲んで来ているから、もうビールは切り上げ、今度は日本酒を仕入れにいそいそと立ってゆく。その後ろ姿を見送りながら厭に冷たい感じの刺身に、ちょっと載せたワサビの<sup>から</sup>猛烈な辛さに、私の口がひん曲がった。塩辛いばかりの醤油も入院以来、舌に触れていない。勝手に身体が避けるのだ。そして、友人が<sup>せんりひん</sup>戦利品の如く抱えて持ち帰った<sup>かんざけ</sup>燗酒（名の知れた<sup>なだめいがら</sup>灘銘柄）も新たな悪臭に過ぎない。

どうやら「<sup>あかぎ</sup>赤城の山も<sup>こよいかぎ</sup>今宵限り」の名セリフ通り、改めて今後を覚悟せねばならぬ。『天は<sup>にぶつ</sup>二物を与えず』とは何の意味かを我が身で痛感、即ち酒と刺身の深い味わいを指している。即ちこれは、恨みっこ無しの大いなる変容である、と。

## 6 痙縮、本格化にて<sup>そうろう</sup>候

これ以前、施設入所後のニタ月日から既に週一回、デイサービスに出かけている。三階食堂にある簡易リハビリ具だけでは心もとなかった。独りで毎日やるのも目的意識に<sup>か</sup>欠け<sup>が</sup>勝ちで長続きしない。そこで、担当ケアマネ（福祉協議会所属）に相談し、<sup>あんけん</sup>案件を選択したデイサービス先は、「食事・入浴・ゲームをセットで提供する」いわゆる保養型経営でなく、リハビリ運動主体に一回あたり三時間のメニューでおこなう健康クラブである。その為の器具・設備・トレーナー陣がそろっている。

送迎付きだが車椅子使用はサービスの対象外で、<sup>しりょう</sup>バリアフリー仕様のクラブ内を私は杖歩行である。約一年間通い続けた頃、世間に新型コロナウイルスが広まった。世界に同時多発のパンデミック（感染爆発）だ。サーコー施設入所の皆が、或る日から一斉に各デイサービス行き休止宣言となる。外部との出入りが遮断され、通常の内親面会も原則不許可、の条件は何処の施設でも同じだ。

「アタシはもう息子と会えずに、このままきつと死んじまうんだ」と心細く嘆く、<sup>みたけ</sup>身丈の縮んだ小さな九十歳前後のお婆ちゃんを、当初は笑って居た。

それから数年間、寄せては返す<sup>かいなみ</sup>海波の如く<sup>な</sup>凪ぐ間もあらばこそ、五波六波と<sup>しぶき</sup>飛沫を上げる流れは一向に止まない。地球上各地で変異ウイルスが発生し日本にも襲来、水際を搔い潜った。当面数ヶ月の辛抱で危機を乗り越えればコロナ禍が済む筈だった。それが途切れずに断続し、やがて<sup>しゅんかしゅうとう</sup>春夏秋冬の巡り来る一年をいつの間にか二、三回も越えた。流行が日常化した<sup>あんぱい</sup>塩梅だ。

やがて、その<sup>よは</sup>余波だろうか当施設内では、自室での転倒事故が発生し出す。いずれも重症・入院となる<sup>きこつ</sup>鎖骨・<sup>だいたいこっせつ</sup>大腿骨折のケースが増す。<sup>たんす</sup>箆<sup>ひきだし</sup>笥の抽斗を手前に引っ張って仰のけに倒れる人、朝ベッドから降りたてにボタンと前のめりに顔面を打ちつける等、<sup>からだ</sup>身体の重心移動機能が<sup>そが</sup>阻害されつつある証拠だった。外出制限が続き自室に<sup>こも</sup>籠る、その末の運動不足という事例であろうか。やがて退院して当施設に戻れども、一度<sup>そこ</sup>損なわれた箇所（主に骨）に<sup>きいん</sup>起因する<sup>しゅうふくふぜん</sup>修復不全の歩行ぶりが痛々しい。

これを我が身に<sup>しず</sup>関連して述べると、一度はコロナ流行が<sup>しず</sup>鎮まり気味、だが後になってみれば僅かに束の間<sup>かいきん</sup>解禁された<sup>がいしつじしゅく</sup>外出自粛から、再び従来のペースで健康クラブのリハビリに出掛けた。すると、私の身は既に小さな変化（痙縮）が増していたのである。

つまり、運動メニューの合間に<sup>しりょう</sup>生理的欲求（小用）を満たす為のトイレ行きが、なお杖補助歩行で可能なのだが、<sup>いかん</sup>如何せんその<sup>こういちゆう</sup>行為中に、「何かが変わだ？…きつと危ない！」と身のグラつく不自然なアンバランス感が増していた。気付けば、<sup>みぎあし</sup>後遺症側の<sup>みぎあし</sup>右脚に、普通に立って自重を支えるに必須な、数秒単位

以上の静止余裕が、いつの間にか欠損している。それも、症例新たに右脚の脛・腿がブルブル小刻みに震え出し、肝心な足裏も床をしっかりと踏みしめる安定感が薄れた。

我が身を疑う、とは此の自覚の瞬間だろう。健康クラブの清潔な個室トイレで転倒し骨折する図が、思い浮かばぬ筈はない。このままでは、そうなる事態を避けられぬ。妄想ではない。

今やふたたび、自分の身体の露骨な現実と否応なく向かい合い、「叶わぬ敵」の出現を知った。クラブ退会を決意し、事が起こる前に辞めるのが最善手である。クラブ所属の身体健全なトレーナーには分かり難い感覚だ。その大元の理由説明は差し控えた。もう少し、健康クラブにリハビリ目的で通って居たかったが、みすみすの自損事故で相手に迷惑を掛けてはいけない。

身の違和感は、実はずっと以前から生じていた、前述の回復期棟(?) 381号室でも…。

即ち、リハビリ棟に居た頃から既にうすうす感じた左右の足の長さ違い、ふと右脚が寸詰まりになっている感覚。両足をベッドに伸べてみると、そんな事実は無く、我が左右の脚長は指先迄がほぼ等しい。それでも、一階訓練室で平らな床を踏む瞬間、必ず右の足裏にイミング遅れの着地感、数字にして五センチほどの差、当時からその感覚がつきまとう日常を思い出した。

ところが今回は、筋肉系統により強い痙攣付きである。そのまま放っておけば何時までも震え止まず、勝手に右脚の足首・脛・膝・腿が一体となって連携し、ワナワナ、ブルブルと貧乏ゆすり状態を増幅させ、夜中でも朝でも、出先の健康クラブでも時と場所を選ばない。

自室では、新たな震えぶりを面白がって平気でも、人前ではこの症状発生を知られぬよう、意識的にちょっと右足裏を床接地から浮かす。即ち、自重圧力から解放する。すると即座に痙攣は止む。だが、杖歩行中にこの痙攣が起こるや、たちまち困難に陥る。それをどうするかと言えば、只その場にじっと佇んで、右足痙攣の波が退くのを待つ。数秒で止めるコツを、じきに痙縮補完要領で見つけた。それを理屈的な言葉での説明は難しい、微妙な体重移動利用で只立つだけである。

教授が嘗て、「それを具体的に書いておくべきです」と私に言った例の補正感覚だ。

亦これは、退院前にいみじくも土橋ナースが予言で、「後遺症変化に五、六年は付き合いなさい」と指摘したが、その変化の一端がこれだろうか?と覚悟した。

コロナ下の運動不足が元で起こる不調(身体アンバランス)であるなら、必ず左半身にも多少は感覚弊害が生じるはずだ。ところが、後遺症の右手指はすっかり箸を持ちたがらず、亦パソコンのキーボードにも触れたがらぬのに、左手は自在に動き、休みなく用を足してくれる。手足が、それぞれ左右一対に付いている事の僥倖に改めて気づき、私に似合わぬ哲学的省察を行った程だ。

「何故、一対なのか?」と。それと同時に、懐かしく童謡歌詞が思い浮かんだ。

「♪ふたあつ ふたあつ なんですよね おめめが 一二 ふたつでしょ ♪おみみも ほらね ふたつでしょ ふたあつ ふたあつ まだあって おててが 一二 ふたつでしょ あんよも ほらね ふたつでしょ」が何度も耳底から湧く。

やはり持って生まれた生来、いくら病んでも哲学的とは言えぬかも知れない。

今では車椅子の前後進に右手の出る幕は無く、左手で振る杖で漕ぎ、左足が床を搔く。嘗て、回復期リハビリ棟に移動の頃は、右手が曲がりなりにも伸びて下に垂れ、車輪に巻き込まれる危険性をナースに何回も手厳しく注意されたものだ。ところが、今現在の私は如何か?

右腕は、いつの間にか痙縮の進行度を着々と増し、既に車椅子のひじ掛けを越えられぬ! もし越そうとすれば、痺れと同時に針の筵に包まれる如きチクチクする感覚が右腕にともなう。しかも、その刺針感が次第に強まって痛みに似ている。そして、右腕の可動域は相当に狭まった。歩行には両腕の振りが必須なのに! やがて全く可動域ゼロに成るのでは? チクチク感が激痛に変わるのでは?

ふとした時に、その恐怖感が身内にジワジワ湧き起こる。しかし、それが何だ？

元来、心配事に事欠かぬ後遺症の身である。右半身の痺れと痛みがどれほど当人の負担になって居るか、今では痛みの常駐に半ば慣れてしまい、我が身が以前よりも非常に疲れやすいと分かるのは、自己防御の為の効果的眠気を短時間置きに波状的に送り込んでくる、日々有り難い我が生理の派生事実で知れる。それに逆らわず、「待つて居ました！」の貴方任せでベッドに身を投げ出すのである。何か活動したい午前中であろうが、夕食後の寛ぎを一時見捨ててもいい。

つまり、左胸側を下に敷き、両足を折って縮める「カタツムリ寝相」と自分でそう呼ぶ、あつという間に寝付く最良手段へと…。思い返してみれば結局、この方法は既にリハビリ棟381号室でおこなっていた。但しあの当時は、人前のごく短い午睡に限られていた。だが今は四六時中、自室内に籠り「極楽、極楽」と呟く身の蕩けるような、うっとり感を貪るのだ。

☆

これを客観的に傍から眺めたら、障碍ある身の単なる老衰と見えぬことも無かろう。だが、それだけではないようです。何故ならば、現に貴方は今この文章を頭から読んで末尾までたどり着き、パチンと私の左手が打ったキーボードのピリオド音を、たった今聞いたのですから…でしょう？

☆

それに、ここでもう一つだけ打って付け足せば、今日の昼食時に嬉しい発見があったのです。何時もはスプーンとフォークをお膳につけて貰い、左手で二つを交互に使って食べている。それがさっき、箸が付いていたから仕方なく、左手で箸使いを何げなく試みた。すると、これが意外に通用する。もう何年も右掌の指同士五本は痙縮で反発し合い、強ばってしまい箸を握れません。

皺くちゃガールフレンドの掌から受けた感触が、やがて自然に、後遺症の無い左手に移行した事は、前述のとおりです。どうやらそれと同じ原理（摂理？）が、廢れた右手の箸使いの脳内記憶を選択、さっきどうやら左手に対し微妙な信号を送り込んだ。そうとしか思えないのは、左手に箸を持たず訓練を経ていないのに、デザートの小さなパイナップル片まで、摘んで口に運べたから！ 微妙な箸使いで以て、口に物を運ぶ感覚って、殆どセクシーと呼べるのではないのでしょうか？

「ワオ！」って叫びたい自分を待て、暫しと押しとどめました。

散々左手だけでキーボードを打っていた所為か、それともペンを左手に取って読み難い字を書きながらお陰なのか、その他もろもろの行為の集積結果なのか？ 正直、分かりません。

実は、あと一時間ほどで夕食タイムが来ます。その時、配膳係にお願いして、フォークではなく普通の箸をお願いするつもりです。さて、どうなる事か？ 怖いような嬉しいような期待感が、一気にキーボード上を左手に駆け回らせています。偶には、こういう事があっても良いかな？

それでは…いつか亦お目に掛かりましょう。